

Topic

令和7年(2025年)度の放流実績は…

- ・ニゴロブナ: **1,170.3万尾**、ホンモロコ: **94.7万尾**の放流を実施
- ・人工河川へアユ親魚 **21.6トン**を収容、**50.2億尾**のアユ仔魚が琵琶湖へ

ニゴロブナ

本種は滋賀県の特産品である「ふなずし」の原料となるなど、琵琶湖の水産業において非常に重要な種であります。近年その資源量は増加傾向が見られますが、今もなお十分な資源量の回復には至っていません。そこで、当協会では資源の回復を図るために以下の放流を実施しました。

全長 20 mm サイズ種苗

県内の農家の方にご協力を頂き、5月～6月にかけて琵琶湖周辺の水田 583.3 反にふ化仔魚 2,329 万尾を放養し、約 1 か月後の中干し時に全長 20～30 mm に育った稚魚 **1,010.8 万尾** (計画 800 万尾、放流内訳: 北湖 765.7 万尾、南湖 245.1 万尾) を水路・河川を通じて湖内へ流下させました。水田からの平均流下率 (流下尾数 / 放養尾数) は 43.3% でした。この他、6～7 月に栽培漁業センターおよび山田筏施設で生産した種苗 **63.2 万尾** (計画 60 万尾) を守山市赤野井、近江八幡市牧および長浜市延勝寺地先へ放流しました (県受託事業)。

大型種苗

全長 100～120 mm サイズの大型種苗を、栽培漁業センターで 56.5 万尾 (平均体重 23.2 g)、北山田地先筏で 29.8 万尾 (平均体重 18.9 g) 生産し、滋賀県漁業協同組合連合会 (以下県漁連) から購入した 10.0 万尾 (平均体重 15.0 g) と合わせた計 **96.3 万尾** (計画 97.5 万尾) を 10 月～12 月にかけて琵琶湖一円に放流しました (内訳: 北湖 66.5 万尾・南湖 29.8 万尾)。この他、県漁連でも独自事業として 10 月に大型種苗 8.2 万尾を北湖へ放流されています。

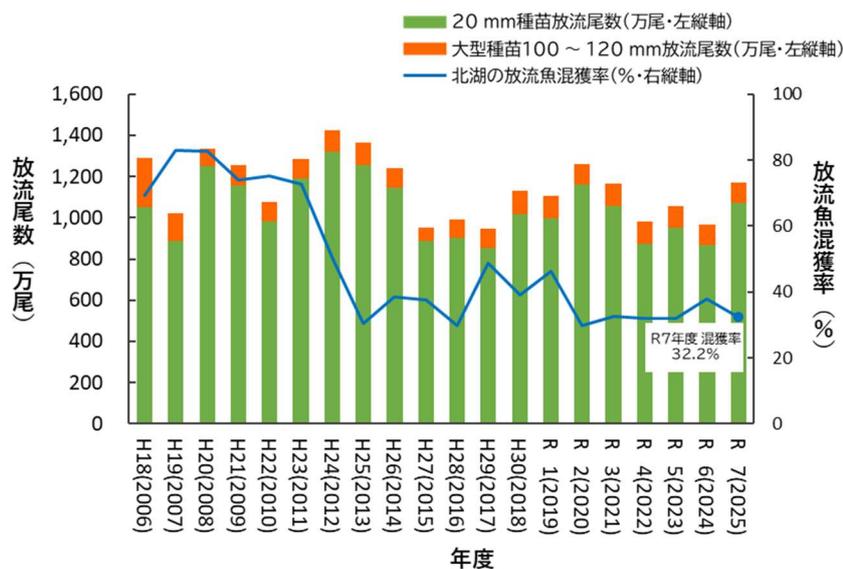


水田への放養(守山市)



ニゴロブナ大型種苗の放流(近江八幡市)

当協会ではニゴロブナの放流効果を把握するため放流魚の一部に標識をつけて放流し、2月～4月に漁獲された個体を用いて放流魚の混獲状況を調査しています。本年度は2025年2月～3月に北湖にて刺網で漁獲されたニゴロブナ1,033尾を調査した結果、サンプル魚中の放流魚の割合（混獲率）は**32.2%**（水田他20mm種苗由来：20.3%、大型種苗由来：11.9%）となりました。北湖での放流魚の混獲率は近年30%台で推移しており、高い放流効果を維持している反面、天然魚の割合が増加していないことが課題となっています。



ニゴロブナの年度別放流尾数と放流魚混獲率の推移

ホンモロコ

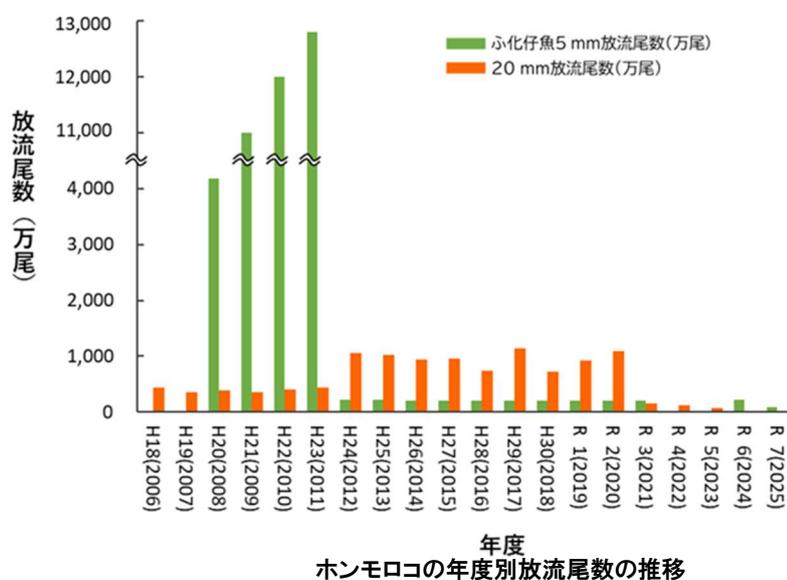
本種の資源量は2000年代には大きく減少していましたが、近年では種苗放流や資源管理などの取り組みの効果もあり、その資源量は増加しています。そのため当協会では現在は大規模な種苗放流を行っていません。しかし、今後再び資源が減少に転じた場合に迅速に対応できるようホンモロコ親魚の保有を継続しています。それらの親魚が産卵した卵を有効活用するため、琵琶湖周辺の水田やヨシ帯へホンモロコのふ化仔魚（一部換算値）**94.7万尾**（計画100万尾）を放流しました（内訳：水田放養20万尾、ヨシ帯放流74.7万尾）。



ホンモロコの採卵基体と卵。生簀に採卵基体を浮かべて採卵する。



ホンモロコの卵放流。採卵基体を水面に浮かべふ化させる(草津市)。



アユ

アユは琵琶湖の漁獲量の中で占める割合が最も高い重要な魚種ですが、近年は気候変動の影響もありその漁獲量は不安定化しています。当協会ではアユ資源の安定化を図るため、以下の通り人工河川の管理運用を行いました（県受託事業）。なお、本年度はアユ仔魚の流下ピークが琵琶湖の高水温時期に重なることを避けるため、養成アユ親魚の収容を例年より1週間ほど遅らせて実施しました。

安曇川人工河川

9月5日～9月16日にかけて、滋賀県淡水養殖漁業協同組合より入荷した養成アユ親魚を計**16トン**（43.9万尾、計画16トン）収容しました。また9月9日～9月17日にかけて人工河川河口に遡上したアユ親魚推定**1.6トン**（11.3万尾）を採捕し産卵床水路へと収容しました。

姉川人工河川

渇水により姉川でのアユ親魚の特別採捕が実施できなかったため、人工河川のポンプを稼働し河口に遡上したアユ親魚推定**4トン**（38.9万尾）を活魚輸送ポンプにより汲み上げて収容しました。

産卵後の仔魚の流下結果

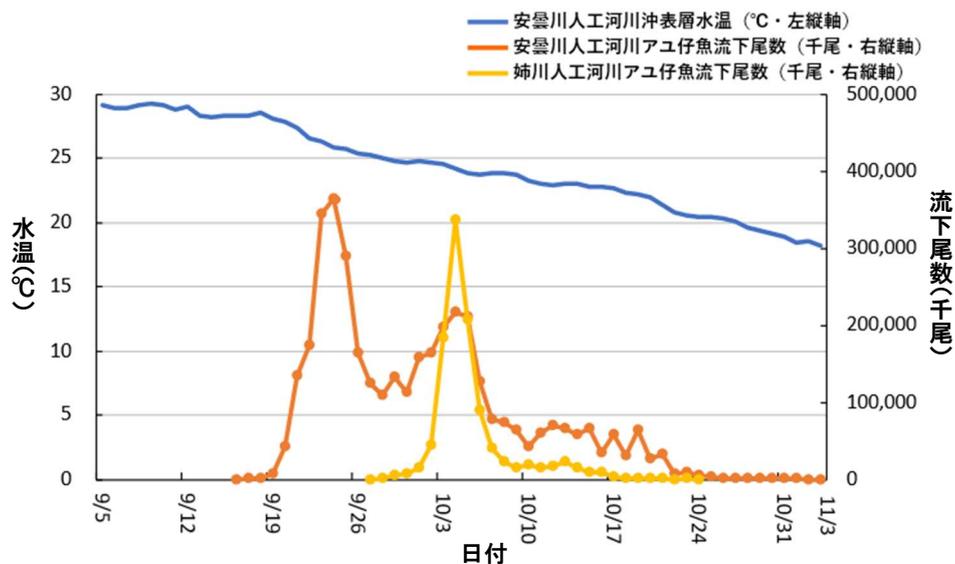
安曇川人工河川の仔魚の流下期間は9月16日～11月3日、総流下尾数は**39.3億尾**（計画32億尾）となりました。本年度も琵琶湖の表層水温は9月中旬まで28℃を超える高い状態が続きましたが、流下仔魚が増加した9月下旬以降は26℃台以下となり、計画通り高水温期に仔魚の流下ピークが重なることを回避できました。

姉川人工河川の仔魚の流下期間は9月27日～10月23日、総流下尾数は**10.9億尾**（計画8億尾）となりました。

これら両人工河川の結果を合わせた全体の流下仔魚数は **50.2 億尾** (計画 40 億尾) となりました。そのうち早期のアユ漁に貢献するとされる 9 月中の流下数は 20.2 億尾 (全体の 40%)、主に中期以降のアユ漁に関わると考えられる 10 月以降の流下数は 30.0 億尾 (全体の 60%) となりました。



安曇川人工河川での親魚放流(左)と姉川人工河川での親魚採捕の様子(右)。河口に設置したアンドンヤナ(矢印)で琵琶湖から遡上したアユを集め、ホースで吸い上げる。



安曇川人工河川沖表层水温と人工河川流下ふ化仔魚尾数の推移

県水産課、水産試験場、県漁連および各関係漁業協同組合の皆様には、種苗生産、放流、標識調査、その他当協会の事業にご協力を頂き誠にありがとうございました。

水振協ニュース令和7年度版
 編集・発行 (公財) 滋賀県水産振興協会
 滋賀県草津市志那町字柿根 1393-2
 Tel 077 (568) 3451
 Fax 077 (568) 3788